

日本を語る 良いところ悪いところ

ユキーナ・富塚・サントス

日本を語る 良いところ悪いところ

ユキーナ・富塚・サントス

1	世界に誇れる日本の古典	3
1.1	文楽のスズメ、枯れる美学.....	3
2	日本サッカーなぜ勝てない?	4
2.1	ワールドカップ 2006.....	4
2.2	なぜ奇跡が起こらないのか?	5
2.3	貧しい人たちの娯楽 サッカー.....	6
2.4	そもそもは娯楽.....	8
2.5	時差と水の違い.....	9
2.6	真剣にヤレとは言わないで・・・	10
2.7	韓国が勝てる理由.....	12
2.8	ではどうすればいいのか?	13
3	愛のチカラ（フォルツァ・ダモーレ）	15
3.1	日本対ブラジル.....	15
3.2	カフーの微笑み.....	17
3.3	ガーナ選手に告ぐ.....	18
3.4	負けとジンガ.....	19

1 世界に誇れる日本の古典

1.1 文楽のススメ、枯れる美学

日本にいて、日本の蒸留酒など飲んでいると、大地の気が体を巡り、日本の伝統文化について語ることとなった。私が引き合いに出したのはおそらく日本人にしか理解できないのでは、と思える芸である。

私が文楽ファンになったのは5年前のことである。人間国宝吉田玉男氏の後援会の方からチケットをいただき、わが身を狐に代えて思いを遂げるといってお姫様の話を見た。まず、その芸のすごさに驚いた。なにがどう凄いかというと、人間が気配を消すという芸当である。人形氏は人形を操るが、舞台にいる以上どうしても人としての気を発してしまうのだ。気を発せられれば、見る側の気もそぞろ、気が散るのである。そうになると、人形を見ていいのか、人形士に着目するのかわからず、いい気分は持てないのである。

ところが、この玉男師匠、気配の消し方が一流なのである。私は全くの素人だったが、寿司職人が酢飯を握るようになるのに数年かかるように、おそらく、気配を消すのに数年の修行が必要なのではと推測した。

パンフレットを見ると師匠に次ぐ人形士の方が名前を連ね、次々舞台に登場する。ははあと思って比較してみると、やはりこの気配の消し方、人形の動かし方が玉男師匠はピカイチなのである。芸というものは磨けば磨くほど人にアピールするものである。特に伝統古典芸能の世界は顕著だろう。しかし、どおやーと本人が見せたいという気は人形に移すが故に必要以上に主張してしまうものなのである。

国宝の技で驚いたのは菅原道真であった。都を追われ、次第に気が触れていく下りをいかに人形でみせるか、という技である。私はこの技を前から3列目で見た。梅ノ木の下に座り、かつての都を思い出して道真が梅の枝振りを見上げる。絶妙の間である。驚いたのはこの人形の呼吸である。人形士ではなく、道真の胸が動き、全身で呼吸しているのがわかるのである。さらにさらに、驚いたことに、この一瞬の彼のため息がセクシーなのだ。

この瞬間に私は師匠の芸の凄さを感じた。これは枯れた美なのである。脂がのって、芸に磨きがかかった段階ではない。ある一線を越え、丁度いい具合に枯れた美なのである。枯れているが故に人形に気配が入り込むことなく、それでいて、人が演じた場合より（歌舞伎より）はるかに余韻の長い効果を発揮する。

文楽とはこういうことかと思った。歌舞伎を見尽くした人がやがて、文楽に行き着くと言われる理由はこういうことかと思った。

2 日本サッカーなぜ勝てない？

2.1 ワールドカップ 2006

またまた唐突だが、ただ今開催中のワールドカップについて思いを巡らしてみた。

前回の日本開催の時、私は前の会社に勤めていて、世田谷に住んでいた。留学も、転職も結婚も、曖昧モコとしていて、はっきり定まらなかった。それから4年後の開催、同じ日本でこれほど異なった境遇で観戦することになるとは、本当に予想もしなかった。

幸いに、本当に幸いに、努力が報われ、いろんな人から助けを得ている。

有難い限りだなあと思う。

南米旅行記、結婚大作戦などなど・・・報告兼アウトプットをしなければいけないことは多々あるのだが、これまたブログの習性でつれづれなるままに、今思うことを書かせていただきたい。

ワールドカップは一つのスポーツイベント、興行事業に過ぎないので、スポーツ単純にその勝敗だけではなく、実に様々な観点から考えることができる。かつて、10万円だけをポケットに突っ込み単身イタリアに渡り、ワールドカップの仕事を自力で掴んだという日本人女性がいた。本人曰く、サッカー観戦歴三十〇年、サッカーのためなら死ぬ、お金はいいからとにかく会場に入れてくれ、と粘ってワールドカップでの職を得たそうである。

これまた唐突だが、このサッカーファンの方といい、私の知る肝っ玉女性は、概ね四国の出身であることが多い。

彼女からの話によれば、サッカーのルールも何も判ってない連中が、イタリアにコネがあるからと言って、サッカー通を気取るのが、何よりもその身を裂かれるほどつらかったのだそうである。

基本的にどこの国でも参加可能で、無、全くと言っていいほど何もないところから、あれよあれよと言うまにキャッシュフローを生み出すという点では、サッカーには純粋なスポーツとはかけ離れた要素があるのかもしれない。けれども、それでも、やはりそれでも、スポーツ、競技として見たときに、指摘しておくべき点が多々あるのである。

2.2 なぜ奇跡が起こらないのか？

まず、今回の日本の戦いっぷりである。クロアチア戦をみていて、ああこれは負けるなあと思った。

案の定、まだ奇跡は起こる、なんとか勝ち点をいれたい！などというアナウンスは虚しく、ついに得点はできなかった。試合後の中田のコメントはもったもで、後半は相手のペースで動かされていた、これに尽きるのである。こうなってくると、相手がよっぽどアンラッキーなミスをしないう限り、勝ち点というのは望めない。

さて、私は実はこの後の試合、ブラジル対オーストラリア戦の方が見たかったので、引き続き夜更かしすべく、テレビの前に陣取った。

始まって数分、期待どおりの、いやそれ以上の面白さである。何ととっても、ブラジルは上手い、思わず、うっまいなあ！！と感嘆符を連発してしまうほど上手い。サッカーはホントにセンスでやるもんじゃないかと唸ってしまった。民族の違い、カルチャーの違いと言われればそれまでだが、それにしても上手すぎである。

これでは次の試合、いかに日本人お得意の努力と根性を説いたところで、おそらく一点も入れられないと思う。

一体全体、このサッカーのセンスとはナンなのか？日本とブラジルはどこが違うのか？

これはサッカーに限ったことではないが、要するにサッカーとはナンなのか？ということを理解しているか否かだと思う。

サッカー大国ブラジルは貧しい国であった。理解してもらうのは、難しいが敢えて言わせていただくと、貧富の差が激しい。日本に生まれ育った人にいくらこれを説いても、へえーそうか、激しいんだ、という以上の反応は期待できない。

先日おとずれた、ブラジルサンパウロ、さらに主人の実家のサルバドールでもそうだが、いわゆる一般庶民にとっての娯楽は少ないのである。娯楽とは金持ちのものであり、貧乏人は限りあるなかで、驚くような楽しみを見出してきた。裸足でも、ボール一つあればできるスポーツそれがサッカーである。

2.3 貧しい人たちの娯楽 サッカー

ブラジルではいたるところでサッカーをしている子供達を見かける。日本の子供が没頭するようなゲームソフトは一部の金持ちに与えられた特権的娯楽である。みんな素足でボールをけている。夜中の二時に空港からマイオット（私の夫）邸に向かうとき、空き地でサッカーをしている子供達を何回かみかけた。